

【姫路市立山陽中学校区】の取組

1 テーマ

よりよい生き方を求め、自ら気づき、考える子どもの育成
～道徳的価値に照らし、対話で深める授業づくり～

2 テーマ設定の理由

本中学校区が目指す小中一貫教育では、「地域・家庭・学校を大切にする児童・生徒の育成」を目標としている。中でも、善悪など（状況判断）ができる児童・生徒の育成に取り組んでいる。日々の教育活動全体で、道徳教育は取り組んでいるが、行為、行動を支える心の育成が欠かせない。他律的ではなく、自律的な生き方が出来る児童生徒の育成を目指さなければならない。

今後、society5.0の社会で、これから遭遇する道徳的問題に対して、多様な価値観を持つ他者と協働し、納得解を見つけ充実した人生が送れるように、道徳教育、とりわけ道徳科の授業で「主体的・対話的で深い学び」を達成し、児童生徒の道徳性を育むことを目指した。

「道徳性を養う」道徳科の目標に沿って、道徳科の授業を児童生徒だけでなく、教員にとっても楽しいものにするために、テーマを設定した。

3 研究経過

（1）1年次（令和2年度）の取組

授業展開のポイントを考察。教材を使いポイントを確認。

- ①考えを深める手立て
- ②教材の分析
- ③発問の分類と整理
- ④指導案に内容項目を子どもの言葉に読みかえてどのように反映させるか。
- ⑤ねらいがはっきりした授業展開

【全体研修①（令和2年（2020年）5月22日）】

講師 谷田増幸 教授（兵庫教育大学教職大学院）

中学校区で、道徳科の授業についての共通の基盤を確認。

中心発問の思考に時間をかけるため、教材の内容や、道徳的問題を前半でつかませる。

中心発問、補助発問、問い返し、切り返し等、発問の分類を研究。

「特別の教科 道徳」学習指導要領 解説編を教師が読み解くこと。

解説編に書いてある内容項目を、子どもの言葉に読みかえて指導案に反映させる。

【全体研修②（令和2年（2020年）8月11日）】

講師 谷田増幸 教授（兵庫教育大学教職大学院）

ワークショップ形式で教材の分析と発問を考察

発達段階の異なる児童生徒に、ねらいを明確にした授業展開を考えた。

(研修の様子)



【全体研修③（令和2年（2020年）11月2日）】

授業参観及び授業後研修会

授業記録からの分析

「中心発問」「補助発問」「問い返し」が適切であったかという視点から付箋紙に「良かった点」（ブルー）、「改善策」（ピンク）、「疑問点」（イエロー）を書き出し、協議した。

③成果

グループごとに教材を分析することで、一人の場合、見方が一面的になるおそれがあるが、グループの場合、多面的・多角的に問いに対する反応が考えることが出来た。

さらに授業展開に関しても多様な意見を出し合うことが出来た。

研修を通じての課題は、「学習指導要領 特別の教科 道徳 解説編」を教師が読み解くことがかかせないことが確認出来た。授業のねらいとする価値だけでなく、関連ある道徳的価値もじっくり読むことによって、生徒の多様な意見に反応することが出来ることを学んだ。

その上で、授業をする際には白紙の状態生徒と接するように心がけ、考えを受容することの大切さを学ぶことが出来た。教材を読み込むことの重要性を改めて認識できた研修であった。

(2) 2年次（令和3年度）の取組

【小中合同研修会①（令和3年（2021年）4月13日）】

講師 谷田増幸 教授（兵庫教育大学教職大学院）

新年度になり、再度中学校区で、道徳科の授業についての共通の基盤を確認。

【小中合同研修会② 令和3年（2021年）5月17日】

姫路市教育委員会人権教育課要請訪問①・授業参観及び研修

3年「あるレジ打ちの女性」

2年「美しい鳥取砂丘」

講師：姫路市教育委員会 渡邊 雅人 管理指導主事

西山 琢 指導主事

【小中合同研修会③ 令和3年（2021年）6月14日】

姫路市教育委員会人権教育課要請訪問②・授業参観及び研修

3年「和醸良酒一人の和で造るお酒」（自作教材）

1年「人と人のつながりは一川石酒造之助」（自作教材）

講師：姫路市教育委員会 田淵 仁 指導係長
渡邊 雅人 管理指導主事

【校内指導案研修会 令和3年(2021年)8月18日】

講師 谷田増幸 教授 (兵庫教育大学教職大学院)
指導案, 道德授業づくりシート, 板書計画について指導助言
中心発問を深める補助発問で道徳的価値に迫れているかを検討
終末の生徒の発言が, ねらいに迫ることが出来るか等を中心に指導助言

【校内道德授業研修会 令和3年(2021年)9月24日】

授業参観及び事後研修会(研究発表会での授業者による授業)
1年「裏庭のできごと」
2年「美しい鳥取砂丘」
講師：兵庫教育大学大学院 谷田 増幸 教授
姫路市教育委員会 渡邊 雅人 管理指導主事

【校内道德授業研修会 令和3年(2021年)10月20日】 自主教材

授業参観及び事後研修会(研究発表会での授業者による授業)
2年「運命の木」
講師：姫路市教育委員会 渡邊 雅人 管理指導主事

【校内道德授業研修会 令和3年(2021年)10月25日】 自主教材

授業参観及び事後研修会(研究発表会での授業者による授業)
3年「和醸良酒一人の和で造るお酒」(自作教材)
1年「人と人のつながりは一川石酒造之助」(自作教材)
講師：兵庫教育大学大学院 谷田 増幸 教授

【令和3年度(2021年度)中播磨地区小・中学校道德教育研究会】

手柄小・山陽中 各学年で授業公開
実践発表・講演
講師 兵庫教育大学大学院 谷田増幸 教授

【校内道德授業研修会 令和4年(2022年)1月24日】

1年 「いつわりのバイオリン」
講師：兵庫教育大学大学院 谷田 増幸 教授

<地域教材作成についての取組>

郷土の特色が生かせる教材は, 特に身近なものに感じられ, 教材に親しみながら, ねらいとする道徳的価値について考えを深めることができるため, 地域教材の開発をすすめた。

姫路市では各中学校区に地域に題材を取った自主教材を作成している。教材は時代の推移に

よって、表現やより深く道徳的価値を授業で考えさせるための改訂は必要である。郷土への愛着を持ち、今後の人生で積極的に地域の活動に関わっていこうとする子供の育成するため、地域の先人や伝統産業に題材を取り自主教材を作成した。

【人と人とのつながりは一川石酒造之助一】

「フランス柔道の父」と呼ばれ、フランス柔道の発展に寄与した川石酒造之助は手柄地区の出身である。今回、ねらいのはっきりした授業が出来るように全面的に改訂した。フランスで柔道を教え、日本の文化を海外で根付かせた先人の生き方から学ぶことは、生徒たちに意義あるものである。作成に関しては偉人伝にならないように配慮した。

作成のポイントは以下の通りである。

- ①ねらいとする道徳的価値を検討した。(国際理解・国際貢献とした。)
- ②授業の対象学年を決めた。(中学校のどの学年にするか。)
- ③シンプルな記述を意識し、内容を理解させやすいように工夫をした。
- ④事実から逸脱しないように気をつけた。
- ⑤授業実践を行い、その後検討会を実施し、よりねらいを考えさせやすい教材を目指した。

駿河台出版社発行「評伝 七色の帯 川石酒造之助伝」吉田郁子著を参考とした。

吉田先生に貴重な助言をいただいた。

先生の助言は、教材作成に関して大いに参考となった。事実のどこを切り取り、教材に活かしていくか、幾度も検討し完成させた。

【和醸良酒一人の和で造るお酒一】

地域の伝統産業に携わる人の生き方を通して、郷土を愛する態度や、郷土の発展に寄与しようとする意欲や態度を育てたいと考えた。

校区で日本酒造りに従事している川石光佐さんの生き方を通して、ねらいが達成できる教材を作成した。光佐さんからお話をうかがい、彼女の思いや考えを教材に反映させるようにした。

印象に残った言葉を挙げてみる。

- ①「酒造りは積み重ね、早く気づく。あとで巻き返せない。」
- ②「小さなことにこだわると、大きなものは守れない。」
- ③「家業を継ぐように言われたことはない。」
- ④「新しいものに向き合う。ちょっとした変化に気づく。」
- ⑤「大学3年のインターンシップでの井上さんとの出会い。酒造りへの姿勢。」

光佐さんの「気負わずに、」と言われていたことが心に残った。この言葉を教材の核にし、作成をしていくこととした。光佐さんの心情が変わる場面をどこにするか、「家業を継ぐことにそれほど前向きでなかった光佐が、井上さんとの出会いで変わっていった。」その思いを考えさせることとした。生徒と日本酒造りという身近でないものをどうやって結びつけるか、総合的な学習の時間で、日本酒造りや、地域の産業に関して調べ学習を実施した。

自主教材を使っただけの道徳科の授業は、生徒が知らなかった事実を知ったことがまず大きな意義があった。次に、自分たちが住んでいる地域に「こんなに力を尽くしている人がいたのだ。」という感動も同時にあった。今後、授業実践、事後研修、改訂、授業と継続しさらに考えるに値する教材としていきたい。

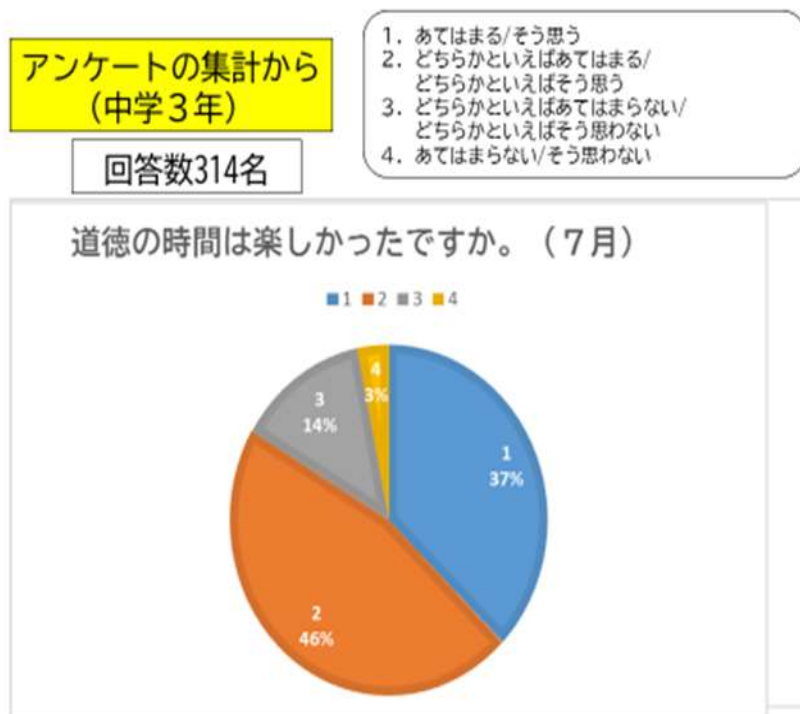


4 研究の成果と課題

(1) 成果

2年間に渡る研究を振り返るにあたって、中学校3年生の道徳科の授業に関する意識の変化を述べることにする。

<アンケートについて>



定期的に道徳科の授業についてアンケートを実施している。

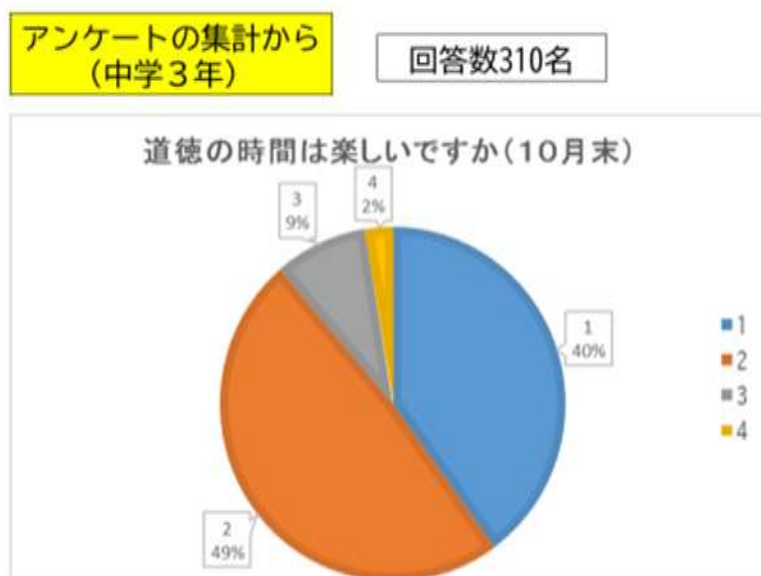
左記のアンケートは、中学校3年生の結果である。

概ね生徒は道徳科の授業について、楽しいと捉えている。

さらに「楽しさ」の内容について記述をいくつか紹介する。

○自分の考えを深めることは楽しいけど、難しくてよくわからないテーマもあるのでどちらかといえばあてはまる。

○道徳を通して新しい気づきがあったし、友だちの意見が面白いと思うことが多かったから



○友だちの意見から、自分とは違った視点や着目点を発見できて、そんな考え方もあるんだと、新たな思考を産むことができたから

○自分の意見を持てたものは楽しいと感じました。難しいものもあったので、毎回は楽しいとは思わなかったけど、基本的には楽しかったです。

○正解がないので自由に言える。自分の考えがもっと深められるから。

○楽しいというより、いろんなことが学べました。たとえば自分ではこういう考えだけど、この人はそういう考えなのかということ

○自分とは違う意見や考えが知れたから

肯定的な意見ばかりではなかったが、生徒に考える楽しさを、授業で実感させたことは、2年間の研究の成果ではないかと考えている。

研究主題を踏まえて、道徳科の授業に関する研修を、小中合同で行ったことは大変有意義であった。小学校での学びを中学校でさらに深める、道徳科での学びを継続することが出来た。

授業を、終末の予想される子供の反応から考えていくことで、ねらいのぶれない授業を構想することが出来た。ねらいに向かって教師と子供が共に考えていく授業が徐々に出来つつあり、継続する必要性を実感している。

道徳科の授業での「深い学び」とはどのようなものか。教師の「教えてやろう。」という姿勢で授業に臨む傾向が見られていたが、授業を繰り返していく中で、徐々に子供の方から意見を出させよう、考えを言えるように導こうと変わっていったことも見逃せないことである。

「対話的な学び」を進める中で、自然と「深い学び」に至る授業も見られた。教師が子供の発言をコーディネートする姿勢は忘れてはならないものである。

(2) 課題

今回、デジタル教科書やICT機器、大型テレビ等を利用する授業も行った。視覚に訴えることで、子供は教材の内容をしっかりと把握出来た。しかし一方、中心場面でchromebookを利用し考えを打ち込むと「対話」が二の次になる場合が見られた。「対話」を充実させるための機器の利用という点を外してはならない。

さらに、学習支援が必要な子供に対する手立ては喫緊の課題である。道徳科の授業は国語の授業ではないが、教材の内容と道徳的問題を把握していなければ、子供は授業に参加出来ない。支援が必要な場合は、複数教師での指導も必要になってくる。

子供の考えを受容するために、チームティーチングを実施したが、教師は考えを聴くことに集中できたようであり、今後もっと取り入れたい指導形式である。

2年間の研究を通して得たことを、継続して取り組んでいくことが一番の課題である。小学校低学年では、理解させる必要がある道徳的価値を、学年が上がるにつれて価値を通して自分が自分に問い、生き方を考える学びにしなければならない。

「道徳は人間の生き方を考えるので難しい。」と言われるが、難しさを教師が避けず、子供と共に考える時間とすることで、共に楽しい時間となるはずである。

今後も「知的な楽しさのある道徳科の授業」を目指して授業実践を続けていきたいと考えている。



5 参考文献

教育出版 発行

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説

特別の教科 道徳編

廣済堂あかつき

小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説

特別の教科 解説編

兵庫県道徳教育実践推進協議会

兵庫県教育委員会 発行

「対話的な学び」を通して生き方についての考えを深める道徳科の授業をめざして
実践研究編

駿河台出版社 発行 吉田郁子著

「世界にかけた七色の帯 フランス柔道の父 川石酒造之助 伝」